



宗門校として

歎異抄 第三条

善人ですら極楽浄土へ行くことができる、まして悪人は、極楽浄土へ行くのは当然ではないか、私はそう思いますが、世間の人は常にその反対のことを言います。悪人ですら極楽へ行くことができる、まして善人は、極楽へ行くのは当然ではないかと。世間の人のいう方が一応理屈が通っているように見えますが、この説は、本願他力の教えの趣旨に反しています。と申しますのは、自ら善を励み、自分のつくった善によつて極楽往生しようとする人は、おのれの善に誇つて、阿弥陀様にひたすらおすがりしようとする心が欠けていますので、そういう自力の心がある間は、自力の心を捨ててただ阿弥陀様の名を呼べば救つてやろうとおつしやつた、阿弥陀様の救済の本来の対象ではないのであります。しかし、**そういう人といえども、自力の心を改めて、もつぱら他力、すなわち阿弥陀様のお力におすがりすれば、正真正銘の極楽浄土へ行くことができます。**ところが、我らのごとき心の中にさまざまなどす黒い欲望をいつぱい持つ者が、どういう行によつてもこの苦悩の世界を逃れることができないでいるのを阿弥陀様はあわれんで、あの不可思議な願いを起こされたわけですから、もともと阿弥陀様の願いを起こされる本當の意思は、この悪人を成仏させようとするためでありましょうから、自分の中に何らの善も見出さない、ひたすら他力をおたのみするわれらのごとき悪人のほうが、かえつてこの救済にあずかるのに最もふさわしい人間なのであります。だから、善人ですら極楽へ行くことができます、まして悪人は極楽へ行くのは当然ではないかと、なくなつた法然聖人が仰せられたのも、深い理由があつてのことです。



第14号で第1条、第29号で第2条を紹介しました。

今日は第3条です。

ここ三ヶ月の間に、私は題名に「歎異抄」が入っている書籍を7冊読みました。梅原猛先生の現代語訳が、自分にはしっくりときたので、不定期に紹介させてもらうことにしたことは、すでに第14号で書きました。

『悪人正機』については、親鸞聖人の一番大切な著書である『教行信証』でも、明確にされていないことですが、まさにこのことが、親鸞聖人の本願他力の真髄であると思います。

「**そういう人といえども、自力の心を改めて**」と、あります。

別の書籍にあった訳では、この部分は、

「**そういう人も、我が身の善をたのむ驕慢な自力の心を改めて**」

と書かれていました。

これから、しっかりと学びを深めていきたいと思っています。

本学園創設者 石原堅正先生の『心の学園』についての言葉です。

われわれは生きております。しかしよく考えてみると、実は生かされて生きているのであります。たとえば、私は空気一吸、水一滴も自分で創造した覚えはありません。しかるに、空気も水も、電気も太陽も、全力をあげて私を生かしてくれています。不思議と申すほかありません。何だかそこに感謝の念がわいてまいります。今ここに、私が人間として生かされ、生きているという不思議さに感動できる心をはぐくむのが、心の学園です。

36年間、義務教育である中学校に勤務していた自分にとって、義務教育ではない高等学校の存在理由とは何なのか、しかも公立ではない私学。昨年一年間、何度も自分自身を見失いそうになりました。そしてそのたびに、この『心の学園』に助けを求めていました。

本校は、毎朝夕に『合掌、礼拝』があります。「今日一日、報恩感謝の心で過ごします」と唱えます。

『心の学園』として、深い学びのある中部をめざします。